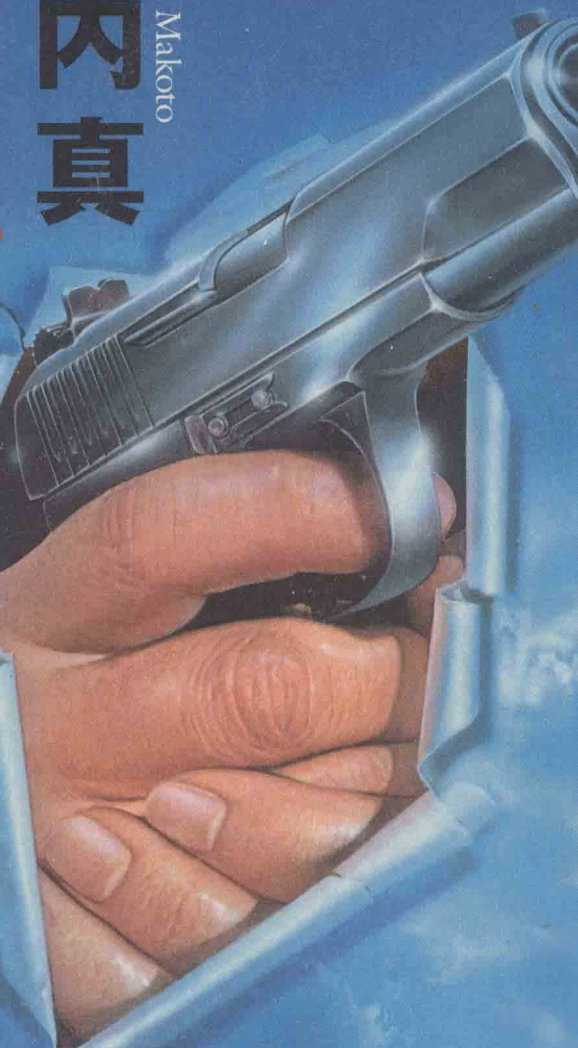


Takeuchi Makoto

竹内真

そこつけんじゅう

粗忽拳銃



# 粗忽拳銃

そこつけんじゆう

集英社



本作品の一部は「小説すばる」1999年12月号に  
掲載されました。

そ こつけんじゆう  
**粗忽拳銃**

2000年1月10日 第1刷発行

著 者 たけうち まこと  
竹内 真

発行者 小島民雄

発行所 株式会社集英社

〒101-8050

東京都千代田区一ツ橋2-5-10

編集部 03-3230-6100

電話 販売部 03-3230-6393

制作部 03-3230-6080

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 加藤製本株式会社

定価はカバーに表示してあります。

©2000 TAKEUCHI Makoto, Printed in Japan

ISBN4-08-774449-3 C0093

乱丁・落丁の本が万一ございましたら小社制作部宛にお  
送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。  
本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、  
法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

## 目次

一、粗忽発射 5

二、看板のガン 59

三、銃ゲーム 117

四、はてなの弾丸 191

五、撃つなら今 255

装画 ● 西口司郎  
装帧 ● 多田和博

粗忽拳銃

第十二回小説すばる新人賞受賞作

## 一、粗忽発射

### 1

「俺より面白えことを言うんじゃねえ」

流々亭天馬は、吠えるように言い放った。

ジーンズにTシャツ、右手には銀色の拳銃。

少々伝統から外れた姿かもしれないが、これでも噺家の端くれである。素人がプロである自分より笑いを取っているような状況には我慢がならないのだ。

可奈や広介を笑わせたのは、目の前に立つ長身の男。

時村和也は、天馬より頭一つも背が高い。自然、天馬は顎をしゃくって空を見上げる格好になる。

そんな天馬を、時村が余裕の笑みで見下ろしていた。——天馬より二つほど年下なのだが、根が横柄で偉そうなのである。

「そんなもん構えて、何ができるんだよ」



「うるせえ馬鹿野郎」

即座に言い返したものの、何ができるといふわけでもない。何しろ拾い物の拳銃なのだ。どうやら壊れたモデルガンらしく、いじり回しても引き金自体が動かなかったのである。

それが分かっているから、時村も強く出てくるのだ。尊大な性格に酒の酔いも手伝い、時村は勝ち誇ったような声を上げてきた。

「撃てるもんなら撃ってみろ！」

「おお、撃ってやらあ」

天馬の方も酔っている。横から広介や可奈が止めに入ろうとするのを振り払い、右手の指に力を込めた。

「バーン！」

落語で鍛えた大声を、夜空に高く響かせる。

声だけが響くはずだったのだ。

弾など出なくても、天馬の大声ならば大抵の奴は怯ひるんでしまう。それで時村をびびらせて、高笑いでもしてやれば済むはずだった。

しかし。

引き金は、何の抵抗もなく動いた。

耳をつんぎく轟ごうごん音と共に、銃口が景気よく火を噴いた。

耳元に風を感じた。

時村和也は、しばらくは何が起きたのか分からなかった。——目の前の天馬が、ただ呆然と目を見開いている。横にいる可奈も広介も、その場に立ち尽くして自分の方を見ていた。

自分の、斜め後方。

時村は、恐る恐るそちらに目をやった。

電柱に貼られた、選挙ポスター。

太<sup>ふ</sup>太<sup>ふ</sup>しい笑みをたたえた政治家の、顔面<sup>けんめん</sup>のど真ん中に穴が開いている。

器用に片方の鼻の穴だけ広げたような格好だった。そこからかすかな煙さえ漂っている。

何て間<sup>ま</sup>抜けな顔だと思った瞬間、戦<sup>せん</sup>慄<sup>りつ</sup>が走った。

弾<sup>だん</sup>痕<sup>こん</sup>。

ということとは、実弾が出たのだ。

自分の目の前で、拳銃が弾丸を発射したのである。

そういえば、どうも周りの空気がきな臭い。

時村は、くると天馬に向き直った。

「てんまあ……」

怒りをぶつけようと思うのに、口からはさがるような声しか出てこない。天馬を睨<sup>にら</sup>みつけながら

呟<sup>つぶや</sup>くのが精一杯だった。

「……撃ち、撃ちやがったな」

立ち竦<sup>すく</sup>んでいた天馬だったが、その声で我に返ったようだった。時村の情けない表情が、却<sup>かえ</sup>って

天馬の心を落ち着かせたらしい。

「お前が、撃ってみろって言ったんじゃねえか」

右手に銃を握りしめたまま、唾を飲み込んで言い返してくる。

時村も黙っていなかった。へたへたとその場に座り込みつつ、怒鳴るような声でやり返す。

「撃てって言ったからって、本物で撃つことないだろうが！」

その声も、妙に上ずって甲高く響いた。

どこか理不尽な物言いに、時村自身が違和感を覚えた。痺れたような頭の中に、笑いの衝動が浮かび上がってくる。

天馬の口元も、一瞬ほころびかけたようだった。しかし笑いの気配はすぐに消え去り、天馬はぐつと口元を引き結んだ。

天馬と時村の視線がぶつかり、妙に密度の濃い沈黙が流れる。

時村を傲然と見つめ、天馬が腹から絞り出すように声を出してきた。

「——安心しろ、峰打ちだ」

●

そんな二人を、高杉可奈はじつと見つめていた。

天馬と時村は、そのまま黙って睨み合っている。どちらの顔も怒気をはらんでいたが、驚愕から立ち直って吹き出す寸前のようにも見えた。

沈黙に耐えきれなくなったのは、傍らで見ていた広介だった。時村の元にしゃがみこみ、おろお

ろとした声を上げる。

「時村君、大丈夫？」

広介は天馬の高校時代の同級生だから、時村よりは二つ年上になる。しかし天馬を介して知り合った後も、何故か彼を呼ぶ時は君付けしているのだった。

だが時村は答えない。可奈も横から声をかけた。

「時村！」

可奈はその時村よりさらに二つ年下なのだが、広介と違って誰に対しても呼び捨てである。——いつの間にやら、四人の間にはそういうバランスができているのだ。

時村も、可奈の呼びかけにはゆっくりと頷いた。

「……ああ、多分、大丈夫」

広介に手を貸され、どうにか立ち上がって息をつく。それから再び、穴の開いた電柱とポスターを振り返った。

可奈も天馬も広介も、同じようにそのポスターを見つめた。

政府与党の衆議院議員候補は、撃たれた後でも笑顔を絶やさない。

「……どうしよう」

広介が呟いた。候補者の鼻を貫いた弾丸は、深々と電柱にまでめり込んでいる。

「選挙のことか？」

天馬が言ったが、誰も答えない。天馬は一人で後を続けた。

「俺はこのおっさんに投票するね。——きっと今年は当たり年だろう」

無論、誰も笑わなかった。広介がちらりと振り返り、天馬の右手に視線を落としただけである。強張った指の中に、銀色に光る拳銃。

最初にそれを拾ったのは、他ならぬ三川広介なのである。

ここはやはり警察に通報した方がいいとでも言いたそうだったが、可奈はその前に口を開いた。「とりあえず、逃げようよ」

その一言が妙に明るく響いた。新しい遊びでも思いついた子供のようにだと、可奈自身もおかしくなってくる。

天馬がくくつと喉を鳴らした。時村も大きく頷き、きっぱりとした声で宣言する。

「よし、逃げるぞ」

言うが早い、そのまま走り始めた。自らの恐怖感から逃げ出すように、奇声を上げて思い切り突っ走る。

銃を持ったままの天馬もすぐに後を追った。広介も走り、可奈も最後に走り始める。

四人はそのまま、夜の暗がりの中を全速力で走っていった。

銃を見つけたのは広介だった。四人で夜の遊歩道を歩いている最中、つい拾ってしまったのである。

下北沢の駅前しもきたざわで飲んだくれ、既に終電は無い時間だった。いつものように、このまま広介のアパートに流れて雑魚寝しようということになっていたのだ。

駅から歩いて十五分の広介の部屋は、何かという仲間溜まり場になっていた。六畳の洋室に四畳半の台所があってそこそこ広いし、酒屋をやっている実家からは定期的に飲食物が送られてくる。酒にも食料にも事欠かないので、他の者にとっては格好の別宅なのだ。歩いて帰れる所に住んでいる時村さえも度々泊まっていくほどだった。

男三人に女一人ではあったが、可奈はそんなことなど気にもかけていない。広介の稽古用のジャージに着替え、広介のベッドと布団を占領してさっさと眠ってしまうのである。

そんな間柄だから、可奈が女と見なされることは少ない。歩いている途中も、天馬などは手頃な空き地を見つけて立ち小便をおっ始める始末であった。

「立ち小便、よくぞ男に生まれけりってな」

鼻唄まじりに呟きながら、遊歩道に面した空き地でジーンズのファスナーを下ろす。時村も笑いながら隣に並んだ。

「俺も俺も」

「真似すんじゃないえ」

言い争いの絶えない二人だったが、二人並んだ後ろ姿は妙に仲良さげに見える。可奈も呆れたように笑って視線を逸らしていた。

広介は、そんな可奈の横に並んでぶらぶらと歩く。——ビールやら酎ハイやらをたらふく飲んだ後である。本当は自分もしたかったのだが、こういう状況では可奈のために我慢すべきかと思ったのだ。

そして、その直後。

広介と可奈の二人は、空き地の隅に粗大ゴミの山を見つけたのである。

おそらく不法投棄なのだろう。古びた電化製品や壊れた自転車、草むらの向こうに積み上げられている。

二人は顔を見合わせ、どちらからともなくそちらに近寄っていった。

広介は貧乏役者、可奈は見習いライター。お互い金には苦労している身の上である。粗大ゴミと見れば、使えそうな物を物色してしまうのが常なのだ。

そして、広介は見つけてしまった。

雨に打たれてぼろぼろになったモデルガンの箱。そこから何か顔<sup>のせ</sup>を覗かせている。

街灯の光を反射して、銀色に輝く金属。

広介は手を伸ばし、箱の中からそれを引きずり出した。

意外に重い、ずしりとした手応え。——広介は、こりゃ高級なモデルガンだと喜んだ。

メタリックな銃身が銀色の光を反射させている。銃<sup>じゅう</sup>把は黒く、その中央には星型の刻印。どこか壊れているのか引き金は動かなかったが、それでも大層な代物であった。

「見てよこれ、かっちょいいな」

振り向き様に見せてやると、可奈も歓声を上げて手を伸ばしてきた。——そして、用を済ませた天馬と時村もやってきたのである。

「お、何だ何だ？」

「ピストルじゃねえか。貸してみな」

二人は、瞬く間に広介の手からその拳銃を取り上げた。

「撃てるのか？」

「あれ、動かねえぞ」

「ちょっと貸してみろよ」

「馬鹿野郎、横からがちゃがちゃいじるんじゃねえ」

酒癖の良くない酔っぱらい二人である。ふざけていじり回している内に、何故か口論になってきた。時村が何か冗談を言い、可奈と広介は笑ったのだが、天馬は何故か怒り出したのである。

そして天馬が、時村に銃口を向けた。

その直後の光景を思い出し、広介はその晩何度も飛び起きる羽目になった。

しかし、時村に比べればまだましだったろう。——時村和也は、とうとう一睡もできなかったらしいのだ。

## 2

「いやー、いい経験を見せてもらった」

翌日。起き抜けの天馬が朗らかに笑った。

「本物の銃で人を撃つなんざ、滅多にできるこっちゃねえからな」

その銃は、傍らのテレビの上に置いてある。あの後、処置に迷って広介の部屋まで持ってきてしまったのだ。

「呑<sup>のん</sup>気に寝てやがって」



時村は赤い目で天馬を睨みつけた。——天馬にしては早起きの方だが、まっとうな勤め人だったに既に朝とは言わない時間である。何事も無かったように眠りこける寝顔に、何度殺意を覚えたか知れなかった。

「……こっちは、あの時のことが目に焼きついて眠れなかったんだぞ」

映画業界で働く身だから、発砲シーンぐらいは見慣れている。しかしやはり映像と現実とは別物で、銃で撃たれた恐怖感というのは体験してみないと分からないものであった。

なのに天馬は、そんな時村の内心など気にもかけずにへらへらと笑っている。

「まあ、いいじゃねえか」

大きく伸びをしながらカーテンを開け、二階からの眺めに目を細めつつ言い放つ。

「銃で撃たれる経験だって、なかなかできるもんじゃねえぞ。それをあんなに近くで味わえて、おまけに生きてんだ。ラッキーこの上なしってもんじゃねえか」

「……それじゃ、お前も同じ目に合わせてやろうか？」

眠れなかった怒りも手伝い、時村はテレビの上の銃を掴もうとした。

しかしそれより一瞬早く、ベッドから細い腕が伸びていた。——可奈である。

低血圧で寝起きは悪い方なのだが、いつの間にか目を覚ましていたらしい。布団にもぐり込んだまま、銃を枕に引き寄せて口を開く。

「朝から物騒な喧嘩しないでよ」

眠そうな声でもごもご呟く可奈であったが、その手はしっかりと銃を握っている。

「何だ、起きてたのか」